



大阪の 社会福祉

2025
11
No.842

大阪の社会福祉
No.842

The social welfare in OSAKA



赤い羽根共同募金運動 ～じぶんの町をよくするしくみ～

▲市社協職員が有志で街頭募金活動
(10月1日、上本町六丁目交差点付近)

高齢になるといろいろな出来事に出会う。いいこともあるのだが、どうしようもないアクシデントに見舞われることもある。我が家は妻と二人暮らしなのだが、その妻が転倒して、骨折してしまった▼家事のほとんどを担ってくれていた妻が入院し、退院後もベッドと車いす生活で、病院への送迎から家事、介護事業者との交渉などもすべて私の手に委ねられることになった。単身生活を長くしていたので、家事の手順はちゃんとマスターしているつもりだが、いくつか困ることもあった▼例えば、食事の献立。自分一人なら何でもいいし、近所に食べに出ることも済ませられる。ところが、外出できない妻を満足させる食事は安易にはできない。しかも毎日3食となると、そんなにレポートリーはない。これが一番苦労した▼家事をすることはそれなりに楽しく、妻が手を抜いていた風呂場の隅々をきれいにしたり、捨てられなかった不要なものを捨てたりした後は気分爽快にもなった。しかし、喧嘩しながらでも役割分担しながら、まさに日常を早く取り戻したいとつくづく思った▼高齢になると、新しい暮らしを作ることや準備をしておかなければ。(石)



高齢になるといろいろな出来事に出会う。いいこともあるのだが、どうしようもないアクシデントに見舞われることもある。我が家は妻と二人暮らしなのだが、その妻が転倒して、骨折してしまった▼家事のほとんどを担ってくれていた妻が入院し、退院後もベッドと車いす生活で、病院への送迎から家事、介護事業者との交渉などもすべて私の手に委ねられることになった。単身生活を長くしていたので、家事の手順はちゃんとマスターしているつもりだが、いくつか困ることもあった▼例えば、食事の献立。自分一人なら何でもいいし、近所に食べに出ることも済ませられる。ところが、外出できない妻を満足させる食事は安易にはできない。しかも毎日3食となると、そんなにレポートリーはない。これが一番苦労した▼家事をすることはそれなりに楽しく、妻が手を抜いていた風呂場の隅々をきれいにしたり、捨てられなかった不要なものを捨てたりした後は気分爽快にもなった。しかし、喧嘩しながらでも役割分担しながら、まさに日常を早く取り戻したいとつくづく思った▼高齢になると、新しい暮らしを作ることや準備をしておかなければ。(石)

オンライン参加も
可能です！

お友達同士
での申込も
大歓迎です！



若手職員から学ぶ！

社会福祉施設で働く若手職員が
業務内容、やりがい、魅力などを
お伝えします！

福祉のおしごとと魅力発見ミーティング

「福祉ってどんな仕事？」「福祉にちょっと興味があるかも…」そんなあなたのための魅力発見ミーティングです！

開催日時 令和7年 11月22日(土)午後2時～4時

対象 大学生・短期大学生
専門学校生・高校生

開催場所 リファレンス大阪駅前第4ビル 23階 会議室2307 typeA
大阪市北区梅田1丁目11-4 大阪駅前第4ビル23F

福祉以外を専攻している学生の参加も
大歓迎！(学校教員の参加も可能です)

来場者特典として
ギフト券(交通費相当)を
プレゼント！
(申込み先着30人)



申込み方法 申込みフォームから
お申込みください



申込期日 11月7日(金)

問合せ先 大阪市社会福祉協議会(担当:福祉部)

TEL. 06-6765-5606 MAIL. sisetsu-mail@sisetsukyo.osaka-sishakyo.jp

共催:大阪市社会事業施設協議会、大阪市社会福祉協議会、大阪市福祉人材養成連絡協議会



社会福祉施設の地域における公益的な 取組みをご紹介します⑤

社会福祉法人 大阪自彊館メゾンリベルテ

いざという時の
心のお守りに

東淀川区内にあるメゾンリベルテ(以下、リベルテ)は、社会福祉法人大阪自彊館が運営する高齢者施設や障がい者施設などが併設された複合福祉施設です。リベルテでは、さまざまな地域の実情に応じた地域支援事業をおこなっています。その一つに東淀川区ライフステーション事業を平成27年から受託しており、高齢の方や障がいのある方など、何らかの支援を必要とされる方が住み慣れた地域でいつまでも安心して生活できる仕組みづくりに取り組んでいます。

今回は、東淀川区ライフステーション事業の取組みの一つである見守りキーホルダー事業と、9月30日に開催した見守りキーホルダーに関するイベントの様子を紹介します。



▲見守りキーホルダー

登録者同士がつながり、
楽しめる場をつくりたい

見守りキーホルダー事業は、氏名や緊急連絡先を登録し、登録番号のついたキーホルダーを携帯することで、外出先で倒れるなどの救急搬送や自宅に戻れず保護された際に、速やかに身元確認ができる事業です。現在、登録者数は700人を超えており、いざという時のお守りとして登録する方が多いようです。

また、見守りキーホルダーの登録者が交流できるイベントとして、東淀路地域交流センターを会場に、お茶会も開催しています。

このイベントは、これまで年に1回、登録者のお誕生日月に登録情報等に変更がないかを電話連絡していましたが、10年前に登録した方がいるなかで、孤立対策として独居高齢者や登録者同士のつながりづくりになるような交流できる場が必要ではないかと事業所内で話し合い、令和6年10月から開催しています。

取材当日は、取組み始めてから4回目となるお茶会が開催され、58人の登録者が参加していました。お茶を飲みながら、

取組みのポイント

- 施設と地域が協力し、ともにどのような場がいいかを考える。
- 最後まで満足できるようなプログラムを心がける
- 登録者同士がつながることで顔見知りの輪が広がる



▲全員でもみじを合唱して秋の訪れを感じました

手指を使ったレクリエーションや秋を感じるジグソーパズル、東淀川区社協の地域福祉コーディネーターが考えた頭の体操などの催しが続ぎ、最後は全員で秋にちなんだ歌を合唱しました。始まってから終わるまで、笑顔が絶えず、参加した全員でワイワイ楽しみました。そして、今回のお茶会では、登録者の中から運営や企画に協力するサポーターに応募した14人も一緒に運営に携わりました。



「福祉によるまちづくり」の実現に向けて ―大阪市社会福祉大会―

新たな課題の解決に向けて

市社協は、10月17日に大阪国際交流センターホールで、令和7年度大阪市社会福祉大会を開催しました。当日は、772人の参加があり、地域福祉の推進に永年尽力され、功績が顕著な社協役員及び民生委員・児童委員、社会福祉施設役職員等の方々への表彰状・感謝状を贈呈する式典と講演会がありました。

まず、第1部の式典では、永岡正己会長から開会のあいさつをおこない、「地域社会においては、



▲772人もの、たくさんの方が参加



▲永岡会長からあいさつ

社会的孤立や生きづらさを抱える人が増える状況が続いているなど、地域における生活課題は複雑多様で、深刻なものとなっています。このようななか、市社協では、地域福祉を推進する中核的な団体としての役割を果たすため、各区社協をはじめ、関係機関・団体等との連携を一層強め、『一人ひとりの人権が尊重され、誰もが自分らしく安心して暮らすことができる、やさしさとぬくもりのある福祉によるまちづくり』の実現に向けて、全力ですすめてまいります」と述べました。

続いて、市社協会長表彰として、242人9団体に、市長表彰として、421人36団体に表彰状・感謝状が贈呈されました。市社協会長表彰のうち、優良社協表彰(他の範となる優秀な活動への表彰)の対象となったのは、5団体でした。



▲西川ヘレンさんからユーモアを交えて講演

涙あり笑いありの講演会。
支え合うことの素晴らしさ

第2部では、西川ヘレンさんを講師に招き、「大家族―支え愛、語り愛、励まし愛」をテーマとした講演会をおこないました。ヘレンさんは、タレントの妻で、3人の子どもの母として家族を支えながら、

●福島区 玉川地区社協 こども食堂の開催 (玉川カフェ)	活動の概要 地域一丸となって月1回こども食堂を継続して開催。また、大人同士の交流の場にもなっている
●西区 高台地域社協 高台地域見守り員 連絡会	活動の概要 毎月見守り員連絡会を永きにわたり実施し、同地域内で実施されている清掃活動等の地域活動にもメンバーが参加している
●天王寺区 真田山地区社協 福祉施設入居者等の 地域参加に向けた 取組み	活動の概要 地域内にある福祉施設の利用者をふれあい喫茶やポッチャ大会等に招き、地域住民と交流できる機会をつくっている
●住之江区 粉浜地区社協 活動の発信及び地域の 担い手拡大をめざす 「粉浜社協だより」の発行	活動の概要 「粉浜社協だより」の発行(年2回)を30年以上続け、地域福祉活動等を発信し、担い手の拡大を図っている
●住之江区 太陽地区社協 大学と連携して 進める地域づくり	活動の概要 地区社協がおこなう地域福祉活動に、大学の協力を得て、新たにサロン活動を開始する等、活動の幅を広げている

▲優良表彰を受賞した5団体

ら、実母と義父母と40年以上同居し、多重介護を経験しました。

ヘレンさんは、「母には私を大事に育ててくれた感謝があります。また、義父母にも感謝があります。そのため、愛する親たちを最期まで面倒みたいと思い、今度は私が母や義父母の食事の世話やおむつ交換などをして支えました」と家族愛を感じられる心温まるエピソードをユーモアを交えて語りました。

続けて、ヘレンさんは、「ただ、抱え込みながら一人で介護していくと、どこかで限界がきます。夫や子どもをはじめ、近隣の協力や支え合えがあったからこそ私は見送ることができました」と話し、「40年以上も義父母と母と同居して、年を取りながら生きていくこと、命の大切さを学ばせてくれました。次は私たちの番になります。主人とは100歳まで生きたいねと話しています。本日集まっているみなさまも身体に気をつけ、地域福祉活動を継続し、支え合いを大切にしてほしいです」とメッセージを送りました。

講演会を通して、家族で支え合うことの素晴らしさ、命の大切さ、人とのつながりについて考える機会となりました。

特集

支える人を支える募金 令和7年度(第79回)共同募金運動展開中!

大阪府共同募金会

今年も10月1日から赤い羽根共同募金運動を「つながりをたやさない社会づくり」を共通助成テーマとして全国一斉に実施しています。昭和22(1947)年から市民が主体の民間

運動として誕生しました。寄せられた寄付金は、みなさまの地域で困窮や孤立など助けを必要としている人たちを支援する、さまざまな活動に役立てられます。

10月1日には、大阪府内の各地で街頭募金及び広報・啓発活動が実施されました。今後も、各市町村にて募金活動が行わ

れます。また、赤い羽根共同募金はホームページからオンラインでの寄付も可能となっています。引き続き、大阪の地域福祉のため、みなさまの温かいご支援、ご協力のほどをよろしくお願いいたします。

当日の様子



▲上本町六丁目交差点付近



▲なんばウォークのクジラパーク

スマホからも
寄附できます



大阪		
令和7年度目標額		7億3千万円
内訳	一般募金	5億3千万円
	歳末たすけあい募金	2億円
令和6年度実績額		5億3,846万3,131円

募金運動について、詳しくは、大阪府共同募金会ホームページをご覧ください。

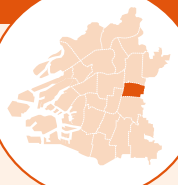
<https://akaihane-osaka.or.jp/> 赤い羽根おおさか

市社協 共同募金運動の取組み

市社協職員有志18人が10月1日の夕刻、天王寺区上本町六丁目交差点周辺で、街頭募金活動をおこないました。この取組みは、市社協においても共同募金の配分金を活用して多くの事業を実施していることから、市社協職員が貴重な財源である共同募金の大切さを再認識することをねらいとして、平成16年から毎年取り組んでおり、今年で22回目を迎えました。

会社や買い物帰りの方、学生や子どもたちなど、たくさんの方々に協力いただき、4万5,777円の募金が集まりました。みなさまからいただいた募金は、大阪府共同募金会を通じ、地域福祉事業や社会福祉施設の整備、社会福祉団体・ボランティア団体等の活動支援など、さまざまな福祉事業に活用されます。

また、10月1日にはなんばウォークのクジラパークにて、10月21日には四天王寺境内西重門付近にて、大阪府共同募金会が主催する街頭募金及び広報・啓発活動にも参加しました。



こどもたちが地域社会で活躍する一歩を
社協や地域が支える

こども喫茶ぷらっと！

こどもたちが主体となって 取組み、気づきから成長へ

東成区子ども・子育てプラザ（運営：東成区社協）は、8月22日午後1時～3時に、東成区社協で「こども喫茶ぷらっと！」をこの夏限定で開催し、84人の参加がありました。

この取組みは、地域の場所づくりをテーマに、普段子ども・子育てプラザに遊びに来ている小学生に呼びかけて運営スタッフを

募集し、福祉教育やキャリア教育の一環として企画したものです。メニューや運営方法は、集まった10人のこどもたちが自分たちで考えました。ゼロからつくりあげる過程や地域の方々の関わりを通して、家庭や学校から少し広がった地域社会のなかで、新しいことにチャレンジする力を伸ばすことができる機会にしたいと考え、子ども・子育てプラザが主催しました。

本番までの準備では、7月30日に顔合わせをした後、片江地域のふれあい喫茶で運営模擬体験をし、8月1日には喫茶の名前や役割分担などについての作戦会議をしました。喫茶の看板やメニュー表、チラシなどもこどもスタッフが手作りで作成しました。

「ありがとう」が原動力に

当日は、こどもたちが手作りチラシを地域で配布したり、友だちを誘ったり、区社協職員が地域等へ訪問した際に配布するなか



▲こどもたちが配膳すると「ありがとう、頑張ってるね！」と参加者の方々がエールを送りました



▲地域の方々に見守られながら、こどもたちはスタッフとして一生懸命がんばりました

活動したこどもたちの感想

- 緊張したけど、ホールで接客したりできて、すごくやりがいがあった
- 自分が笑顔にならないといけないけど、お客さんが笑顔で「ありがとう」と言ってくれて、お客さんが笑顔にしてくれた
- 参加してよかったと思えたので、またやりたい！
- 経験することがあまりないので、とてもいい経験となった
- もっとお客さんが来てほしかったので、次があれば、もっとがんばりたい

えて元気が出た」と笑顔を見せる場面が増えました。
喫茶終了後は、ふりかえり会をおこない、こどもたちから感想を発表してもらいました。また、参加した方々に書いていただいた、「こどもスタッフへのメッセージ」をこどもたちへ伝えました。

模擬体験に協力いただいた片江地域の方々からは、「模擬体験の時はかなり緊張している

開催までの流れ



▲運営模擬体験で得た気づきから作戦会議(8月1日)



▲片江地域のふれあい喫茶で運営模擬体験(7月30日)



▲こどもたちが子ども・子育てプラザや地域等でチラシを配布し、案内しました



▲こどもたちが手作りした看板とチラシ



▲役割分担してみんなで準備



▲活動した10人のこどもたち

様子だったので、大丈夫かな？と思っていたけど、今日は楽しそう
で非常にいい顔をしていた「ふれあい喫茶の時は参加している方へ自分から話しかけることができなかつたのですが、今日は『ごゆっくりどうぞ』など言っていて、成長を感じています」「大きくなった時に、地域の活動を担ってくれるとうれしいなと思います」などの声がありました。

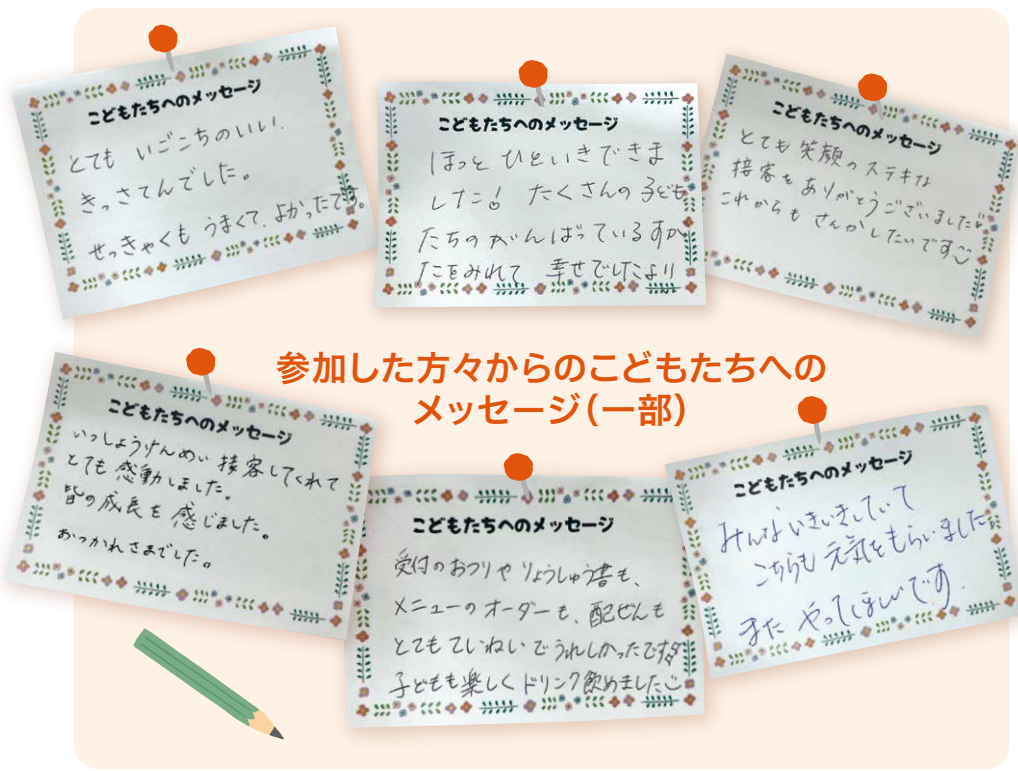
こどもスタッフの保護者からは、「ちゃんとできるかどうか不安で心配もありましたが、楽しそうに活動している顔を見て安心しました。こどもにとって貴重な経験ができたと思います」「こどもたちは初めての接客でしたが、みんな上手にできていました。夏休みの思い出になったかと思えます」「今日活動して

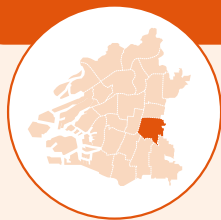
る姿と家で過ごしている姿が違ったので、びっくりしました。家ではダラダラしているのに、今日は一生懸命すごく動いて頑張っていて、そのような一面を見ることができてうれしいです」などの感想がありました。

担当した区社協の辻田麻帆子ども・子育てプラザ職員は、「作戦会議では人と関わること

が少ないキッチン担当が人気でしたが、『ホール担当が一番楽しかった』という感想が多くて驚きました。経験を通して、人と関わることは楽しいと伝えることができたと感じています。地域の方にも、こどもたちにとっても、居心地のよい場所が『こども喫茶ぷらっと！』だったらうれしいです」とふりかえりました。

参加した方々からのこどもたちへの メッセージ(一部)





付き添いが安心を生み、地域参加の一步を後押しする 「おでかけ付き添い ボランティア養成講座」

生野区社協は、9月から10月にかけて、「おでかけ付き添いボランティア養成講座」を全4回の連続講座として開催しました。

そのなかでも今回は、9月30日に開催された第3回「地域の会館に行く」の様子を紹介します。

地域の声をきっかけに

この取組みは、年齢に伴う身体状況の変化や移動手段の減少などにより、一人で外出することに不安を感じている高齢者が安心して地域の集いの場に参加できるよう、地域の会館まで付き添うボランティアを養成するため、企画したものです。

企画の背景として、令和6年度の第2層協議体で移動支援をテーマに取りあげ、会館で実施している活動や行事に参加している方を対象に、普段の生活のなかで困っていることをインタビュー形式で聞き取り調査したことがきっかけとなりました。調査を通じて、「地域の



▲会話を楽しみながら、会館まで付き添い体験

活動場所や集いの場に行く際、誰か一緒に行ってくれる人がいたらいいな「自転車に乗れなくなっても、歩けるうちは自分の足で歩いて行きたい」といった声が寄せられました。これらの意見から、「ちよつとした見守りやお手伝いがあれば、地域の通いの場に参加できる人が増えるのではないかな」との課題意識が生まれ、講座の企画につながりました。

参加のきっかけは、「自分にもできるかも」

講座には4人の参加があり、参加した動機を伺うと、「区の広報誌を見て知った。ちよつとしたお手伝いであれば自分にもできるのではないかな」と思ひ、参加した「普段の地域福祉コーディネーターとしての活動に活かしたい」「見守りや外出支援に必要な正しい知識を身につけたい」といった声が寄せられました。

第1回目～3回目の講師を

生野区で活動している特定非営利活動法人 出発のなかまの会の勝井操さん(たけい ひとみ)が務めました。第1回目では、理学療法士も講師に迎え、加齢に伴う身体機能や姿勢の変化、転倒リスクについて学び、日常生活での注意点や支援時に配慮すべき身体的特徴について詳しい解説がありました。

第2回目では、相手の思いを知ることを「利用者へのリスペクトを忘れないこと」「コミュニケーションを大切にすること」といった基本姿勢について、実際の場面を想定したロールプレイを交えて学び、実際のやり取りを想定した演習でサポートする際の心構えを深めました。

取材当日の第3回目では、普段会館を利用している地域住民の方2人に利用者役で協力いただき、東桃合福祉会館・老人憩いの



▲出かける前に気をつけることやルート等を確認し合う様子

家までの道のりを付き添う体験をおこないました。参加者は「これから百歳体操に参加する」という外出場面を想定し、移動時の支援方法を実践しました。

実際の場面を想定して体験し、心構えを深める

体験は2人1組でおこなわれ、それぞれの参加者が利用者役の方の希望に合わせて付き添いをおこないました。参加者が「気をつけてほしいことや、しんどいことはありますか」と声をかけると、利用者役の方からは「右足が痛いので支えてほしい」「曲がる時など、ところどころで声かけをしてほしい」等の返答があり、実際の場面を想定したコミュニケーションが交わされました。歩行のペースや支え方、声かけのタイミングなど、利用者の状況に応じた対応が実践されました。

体験終了後、利用者役の方からは、「腰を支えてもらうと、歩くのが楽だった」「歩くスピードを気にかけてくれたので、焦ることなく安心できた」「おしゃべりしながら歩くことができて、とても楽しかった」といった感想がありました。

第3回目の講座をふりかえって、講師の勝井さんは、「危険を察知しながらも、まずはその方

がどの程度歩行に不安を感じているかをお聞きし、その方の状態に合わせて支援することが大切です」と参加者へ伝えました。

続けて勝井さんは、「地域には自分のできることを活かして活躍できる人がたくさんいます。この取組みが広がることで、担い手が増え、通いの場に参加できる人が増えてほしいです」と話しました。

高齢者疑似体験から声のかけ方などを学ぶ

講座の後半では、外出に対する不安や恐怖心を理解するため、高齢者疑似体験をおこないました。参加者はサポーターや重り、ゴーグルなどを装着し、加齢による身体の変化を体験しました。体験後には、「足が上がりにくくてつまづきそう」「前

地域のつながりが活動を支える

区社協の川北朋果第1層生活支援コーディネーターは、「外出に不安を感じる高齢者の方が、安心して地域の集いの場に参加できるようにすることは、孤独・孤立の防止や健康の維持にもつながります。また、ボランティア活動というと、特別なスキルが必要でハードルが高いと思われるがちですが、実際には「ちよつとした気づかい」「や」「声かけ」が大きな支えになります。今回の講座を通じて、参加者のみなさんが



▲高齢者疑似体験をしている様子

一つの目的に向かって関わり合う

今回の講座では、参加者・講師・地域住民など、多様な立場の人々が一つの目的に向かって関わり合う姿が見られました。支える人と支えられる人という関係を越えて、互いに学び合い、つながり合う時間となりました。



▲「気軽にボランティア活動を始めるきっかけにしたい」と話す川北第1層生活支援コーディネーター(写真右)

参加者から、付き添いボランティアの体験をしてみたの感想

- 姿勢が前かがみになるだけで、外を歩く時の危険度が変わる
- 車道側も危険だけど、反対側には側溝があったり斜面になっていることも多く、危険だと思った
- お互いを知ることは、安心して出かけるためにも大切だと気づいた
- 安全に歩くための見守りもあるけど、誰かと楽しく歩くことの効果もあるのでは 等

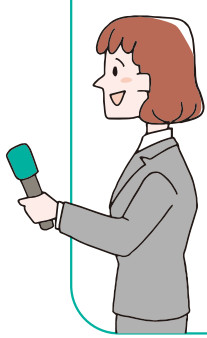
※協議体とは

大阪市では、高齢者の方々が住み慣れた地域で自分らしい暮らしを続けることができるよう、それぞれの圏域での状況や課題に合わせて話し合う場として、第1層協議体(区域全体)及び第2層協議体(地域包括支援センターの圏域)を設けています。協議体では、住民、福祉専門職、行政、企業、NPO等が集まり、あつたらしいなと思う支え合いの仕組み「どのような地域にしたいか」などを話し合い、支え合いの仕組みづくりにつなげています。



安心して過ごせ、心のふるさとになり、一緒に明日を創る

一般社団法人クレア



文部科学省の「令和5年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」によると、病気や経済的理由を除き、心理・社会的な要因などで小中学校に不登校児童生徒数は34万6,482人であり、11年連続で増加し、過去最多となっています。また、令和4年度の内閣府の調査によると、15歳〜64歳の生産年齢人口において推計146万人、50人に1人がひきこもり状態であることがわかっており、包括的な支援体制が必要とされています。

今回は、令和2年9月から天王寺区で活動している「一般社団法人クレア」で代表理事を務める長野順治さん、副代表理事を務める木下博さんに活動内容や、活動するうえで大切にしていること、関わっていることもとのエピソードなどについて、お聞きしました。

同法人は、天王寺区社協が事務局を務める「天王寺区こどもの居場所連絡会」にも参加しており、さまざまな団体と連携しています。



▲クレアのスタッフの方々(長野代表理事:中央、木下副代表理事:左から2番目)

まずは、団体名の由来について教えてください。

長野 「クレア」はラテン語で創造するという意味です。安心してありのままの自分でいられる居場所を創り、生きづらくて困っている人や社会との接点を持ってない人を個別の支援によって課題解決を図り、一緒に明日を創っています。取組みを通じて、明日の成長と変化を生み出し、居場所から未来を創造するために、設立しました。私たちクレアのスタッフは全員教員免許を持っており、元々学校の教師、なかには管理職を経験した人もいるので、その経験を活かして活動しています。

取組みについて教えてください。

長野 年齢に関係なく、長期間ひきこもり・不登校、発達に課題があったり、心や身体の不調から毎日の生活がうまくいかない、家族以外の人との関わりが持てなくなっている、「一人に頼っているんだよ」と言われても誰にどう

頼っているのがわからないと思っている。などなどのために、生きづらくて困っている人や子どもと保護者の支援をしています。関わっていることのなかには、偏差値の高い学校に通っている子どもや、失敗を極端に恐れる子どもなど、一人ひとり背景も状況も違います。

まずは、①保護者からの相談・カウンセリングで生きづらく困っていることや子育ての悩みなどを聞いてから、②アウトリーチ(訪問)し、③ハートクレア(教室)で安心して過ごすなかで心とからの傷を癒し、④フリースペースでの支援を経て、⑤学習・進路支援でレベルアップした学習に取り組み、自分らしく生きる希望や夢を見つけ、社会に出る準備をしていくことが一連の流れになります。ただ、②〜④は固定的なものではなく、状況や希望に応じて実施しています。

取組みにおける
②アウトリーチや、
③ハートクレア(教室)では
具体的にどのようなことを
していますか。

木下 ②のアウトリーチでは、家庭に訪問して、会話や遊び、学習などを通じて、スタッフとの相互理解と信頼関係をつくって

うれしかったですね。

現在活動しているなかで、
課題に感じていることは
ありますか

木下 財源の確保ですね。利用者の会費(支援料)で運営していますが、活動に必要な物品や光熱水費、家賃なども含めた運営費が必要ですので、スタッフの給料は出せていない状況です。社会的に不登校やひきこもりへの支援を求められていると思うので、一時金ではなく、公的に費用を補助してもらうことが必要だと感じています。居場所の活動に、利用者が会費等の支出をすることは、本来は違うと思っています。

長野 スタッフ全員が高齢で、スポーツを一緒にしたり自転車に乗れない子どもをサポートするために走ることは体力的にも大変でした。また、新しい活動者を拡げることも考えましたが、この活動は相互理解と信頼関係が必要であるため、同じようなしんどさやひきこもった経験を持つ、クレアを卒業した仲間でないとい無理ではないかと思っています。

最後に今後の展開や伝えたい
メッセージをお願いします

木下 不登校でもフリースクー

仲良くなり、安心して話せる関係をつくっています。散歩や公園での運動に誘って、外に出る緊張感に少しずつ慣れる機会もつくり、楽しいこともしんどいことも話せるようになって外出することに抵抗がなくなったら、教室での支援に移行しています。

③のハートクレア(教室)では、安心して自分らしく過ごせる居場所であることを第一に考えています。学籍のあることには学習支援もしますが、運動や複数でおこなうゲーム、工作(粘土や切り絵などのさまざまなものづくり)などの取組みをして、経験の幅を広げ、自分を再発見できるようにしています。何かやりたいうことを聞き、プログラムを一緒に考えて、取組みを決めます。いつもと違う場所(家庭・教室以外)で、魚釣りやボーリング、テニス、風揚げなどの活動を取り入れて、さまざまな環境や状況に適応できるように努めています。そして、それらのいろいろな取組みは、安心できる居場所と関係づくりのためのツールです。

活動するなかで、大切にしていることや意識していることを教えてください。

木下 大切に行っていることとしては、「見守り・寄り添い・コミュニ

ルや居場所等に行っていることもはまだ社会と人の接点を持っていますが、どこにもつながらず、家にひきこもっている子ども、その保護者は孤独・孤立を感じ、しんどい気持ちを持って生活している方もいます。

そのため、支援の手が届かず本当に困っている親子が少なからずいることを知ってほしいですね。

長野 「今日何するの?」と思われるように、継続して関わっていきたいと思います。自分のしたいことや本当に好きなことを見つけることは難しいことですが、相談しながら、体験を通して一緒に見つけていきたいと思っています。そして、卒業しても遊びに来れる、しんどくなったら帰れる居場所でありたいと思っています。

財源の確保では、1つとして、ぜひ社協から居場所への基金を集めてほしいと思っています。いろいろな形で活動しているたくさんの居場所があると思いますので、これからも連携・協力して取り組んでいきたいと思っています。

クレアでの活動の様子(一部)



▲天王寺区社協が開催したボランティアフェスティバルでブース出展



▲南港での魚釣り



▲プラバンや缶バッジなどいろいろなものづくり



▲クレアのホームページ



第3期大阪市地域福祉活動推進計画の1年目を総括

—第52回 大阪市地域福祉活動推進委員会—

市社協は8月27日に、第52回大阪市地域福祉活動推進委員会を開催しました。

同委員会は、区社協や民生委員・児童委員の代表者のほか、地域福祉活動やボランティア・市民活動、社会福祉施設等の関係者、学識経験者など11人の委員で構成しています。

市社協では同委員会での検討のもと、令和6年3月に「第3期大阪市地域福祉活動推進計画」（以下、第3期計画）を策定し、現在3年計画の2年目を迎えています。今回は、各項目ごとの1年目の結果及び成果や効果、課題を委員に評価していただき、2年目以降の取組みにつなげることにしました。



▲各委員と1年目の評価をし、2年目以降の取組みについて話し合いました

1年目の総括から2年目以降の推進につなげる

市・各区社協では、第3期計画に基づく具体的な取組みや数値目標等を設定した「実行計画」をそれぞれ作成していますが、今回、事務局から令和6年度の取組みの推進状況として、計画していた内容に対し、実際に実施できた内容・成果・効果や数値目標の達成状況を整理し、量・質両面で総合的に自己評価（A・B・Cの三段階評価）をおこなった結果を示すとともに、今後に向けた課題、展開方向について説明しました。

委員からは、「実行計画」の取組みの自己評価結果について、「各区で設定している数値目標は、区の実情により異なっているが、目標値を高く設定して実績値が下がると評価が低くなってしまう。目標値の設定をどのように考えていけばよいのか、検討する必要がある」「他区の実情を知る指標としてはいいが、評価基準の考え方については、精度をあげる必要がある」「どの区も全項目並べて評価をしているが、各

区においてそれぞれ重点的な項目があるかと思うので、区ごとの優先項目などがあってもよいのではないかと」「総合評価の結果について、A・B・Cの三段階評価で示すだけでなく、そのように評価した根拠や理由を『総括としてコメント』といった形で明記していた方が理解しやすいのではないかと」などの意見がありました。

また、「講座や研修会の開催については、受講者数を目標にあげているが、受講したことによってどのような効果があったかなど、その後のアクションを評価する視点が必要ではないか」などの意見もありました。

参加支援の推進に向けて

次に、第3期計画の重点推進項目である参加支援の推進に向けた取組みとして、令和7年3月に作成した「社協職員・福祉専門職のための参加支援ガイドブック」について確認しました。令和7年度は、その作成したガイドブックに追加・更新していく形で一体的に作成する「場づくり・地域づくりを通じた参加支援」のポイントや視点について説明しました。

委員からは、「地域には多様な主体によるさまざまな居場所やサロン等があるが、場づくり・地域づ

くりをどう捉えていくかが重要である。特に『居場所』というところ、複雑化・複合化・多様化している福祉課題に対応できる場として、ハードルの高さを感ずる」と地域活動者から聞くことがある。実際に運営している方や活動している方が楽しいと思える場であり、いろいろな場があつていいという前提に立ち返ることが大切だ」との意見もいただきました。

福祉分野に限らない多様な主体による場があることで、既存のサービスや制度につながりにくい人が参加につながりやすくなることや、参加支援と意識していなくても参加支援にあたる動きがあること、参加支援の場を支える担い手不足や固定化などの課題も含め、地域づくりとして捉えて進めていく必要があることを確認しました。

「社協職員・福祉専門職のための参加支援ガイドブック - 相談支援からの参加支援 -」（令和7年3月作成）



社協職員・福祉専門職のための参加支援ガイドブック

—相談支援からの参加支援—

大阪市社会福祉協議会



みなさまの善意を社会福祉の発展に

—善意銀行—

市社協では、本会の事業運営にご協力いただける市民のみなさまや法人団体からの善意の預託（金品・物品）を活用し、地域コミュニティづくりや地域福祉活動の推進を図るため、社会福祉関係の施設・団体・機関等に助成しています。

スマイルチルドレン様から、4月10日に29万7,280円の金銭預託による寄附を賜りました。寄附金は、大阪市児童福祉施設連盟とこども支援ネットワーク（運営：大阪市の社協）を通じて、市内の児童養護施設やこどもの居場所などにおいて、



▲スマイルチルドレンの方々（後列中央：木下直秀さん、後列右から2番目：梅田亮彦さん、前列：近藤繁さん）と市社協職員（後列左から2番目：吉村常務理事、後列一番右：真鍋事務局長、後列一番左：堀江事務局次長）

有効に活用させていただいています。また、8月18日には、贈呈式をおこない、市社協から感謝状を贈呈しました。

また、昨年（令和6年）に三菱電機エンジニアリング株式会社様から金銭預託によるご寄附を賜った30万円を大阪市障害児・者施設連絡協議会において、活用した一つの取組みとして、9月20日の大阪・関西万博催事に出演する会員施設・事業所の利用者とスタッフ用のTシャツを制作しました。

当日は、ヘルスケアパビリオンリポーンステージにて実施された「OSAKAから地域共生の未来をつくるプロジェクト」でス

大阪・関西万博でステージ発表している時の様子



▲作成したTシャツでステージ発表



▲カホンを手で叩き、迫力ある音を奏でました（ワークセンター中授）



▲自分たちで作詞作曲した歌を披露（スカイ・ラヴ）



介護保険の25年とこれからのサービス供給体制の検討

大阪公立大学大学院生活科学研究科 教授 所 道彦

今年には介護保険制度実施から25周年にあたる。社会保障制度として定着した一方、高齢化が急速に進行する中で、サービスの利用者は増加し、保険の財政、介護の担い手の確保、サービスのあり方の再検討など多くの課題を抱えている。

2025年7月には、厚生労働省の「2040年に向けたサービス提供体制等のあり方」検討会の報告が発表された。2040年に向けた課題として、地域の実情を踏まえて、分野を超えた連携、サービス需要に応じた介護、障害福祉、こどもの福祉分野のサービス提供体制の構築があげられている。サービス需要の地域差に着目し、「中山間・人口減少地域」「大都市部」「一般市等」の3つに分類している点特徴的である。たとえば、中山間地域では、サービスの維持・確保のためには、配置基準の弾力化や地域交通との連携など

柔軟な対応が求められる。大都市部では、人口や施設、サービスの密度が高くコンパクトなサービス提供が可能であるが、団地の多い地域など、高齢化の状況や地域のつながりの薄さなどの課題があり、土地や建物の価格が高く、サービスの基盤整備の費用が多くなることなどが指摘されている。また、介護は、地域の雇用や所得を支えるインフラとして位置づけられており、地域の他の共通課題への取り組みとの連携や「地方創生」が基本的考え方として示されている。

地域の変容や格差への視点は重要である。東京一極集中の緩和・是正など日本全体で格差の状況を改善していくことが必要となっている。この25年、「住み慣れた地域で」というフレーズは定着したが、住み慣れた地域そのものが変容・消滅していく中で、「地域包括ケアのさらなる進化」とは何かが問われている。